

## 個人書誌作成における文学館の役割

—三浦綾子記念文学館を事例として—

岡 野 裕 行\*

## Role of the literary museums in the creation of individual bibliographies

- In the case of MIURA AYAKO LITERATURE MUSEUM -

Hiroyuki OKANO

近年、日本近代文学研究においては個人書誌が重要視される傾向が強まっている。そういった個人書誌に記述される書誌データには、編者が先行書誌を参考にしたもの、そして編者の独自調査によるもの、これら2種類があると考えられる。後者のような調査では、例えば文学館の建設に伴って死蔵されていた資料が公になったりすると、新たな書誌データが多数明らかにされることがある。また、文学館は資料の保存や公開の機能だけではなく、その整理の際に個人書誌の作成を促す働きを持つ。それゆえに文学館は、個人書誌の作成に大きな貢献を果たしていると考えられる。

本稿は、4種類の個人書誌に収録された書誌データ数を分析し、それらと三浦綾子記念文学館との関連性を指摘することで、書誌作成と文学館との関係についてひとつの事例を提示するものである。

In recent years, research in modern Japanese literature has been enhanced by the existence of individual bibliographies. The data from individual bibliographies can come from two sources: it can be inherited from extant bibliographies or it can be newly appended as a result of an editor's investigations. New data may surface, for example, when a new literary museum is founded and material that was held in storage is finally re-examined by an editor. The function of the literary museums is not limited to preserving materials and making them available to the public, but also includes the creation of individual bibliographies. In this way, it can be seen that literary museums make a significant contribution to the domain of individual bibliographies.

By analyzing the bibliographic data in four different types of individual bibliographies and showing the connection between that data and the MIURA AYAKO LITERATURE MUSEUM, the current paper seeks to outline the connections between literary museums and the creation of individual bibliographies.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程  
Doctoral Program  
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University  
of Tsukuba

## 1. はじめに

### 1.1 研究の背景

近年、日本近代文学研究の分野において特定作家の個人書誌の刊行が盛んである。例えば1982年から日外アソシエーツより刊行され続けている『人物書誌大系』シリーズ(2005年3月現在、35巻まで刊行されている)は、個人書誌をテーマとして掲げた日本で最初のシリーズものの図書であり、一巻につき、一人の作家を対象として編纂されている。また、もともとは葉山嘉樹やプロレタリア文学研究から出発した浦西和彦は、近年は研究の中心を書誌作成の方向に移し、『開高健書誌』(1990年)や『田辺聖子書誌』(1995年)、『河野多恵子文芸事典・書誌』(2003年)などを刊行している<sup>1</sup>。筆者も三浦綾子の文学とキリスト教との関係を研究する過程で書誌作成の必要性を痛感し、『三浦綾子書誌』(2003年)を刊行したという経緯がある<sup>2</sup>。これらのように一巻の書物としてまとまらないまでも、たとえば作家の個人全集などには、著作一覧や年譜など、なんらかの形で目録が巻末に添付されることが通例となっている。だがそれらのように全集の一部ではなく、それが単行本として刊行されるという現象からは、近代文学研究において個人書誌というものが重要視されていることを感じ取ることができる。

ではなぜ近年、そのような気運が高まってきたのであろうか。それは黒古一夫が「三好・谷沢論争の意味<sup>3</sup>」で指摘しているように、個人書誌が近代文学研究の発展に寄与するところが多々あると考えられるようになったからであろう。近代文学研究における個人書誌は、単なる書誌データの羅列ではなく、それを研究に生かしていくという明確な意図でもって作成されている。

例えば谷沢永一は、近代書誌学の果たしうる役割として、「著作目録と年譜と年表」「研究文献目録」「文献解題」「雑誌細目」「資料発掘」「文献考証」「索引作製」「本文校訂」という8項目を示している<sup>4</sup>。すなわち、ある作家について研究しようとする場合、研究者は「著作目録」や「年譜」によって当該作家の軌跡を確認したり、「研究文献目録」でこれまでの研究史を概観したり、必要としているテーマに関する研究文献の有無を把握することが可能となる。また、「文献解題」は当該文献がどのような意味を持っているのかを意味づけして提示し、「索引作製」は書誌の内容(二次情報)を眺めるだけではなく、実際に現物(一次情報)を得るための検索ツールとして利用可能という意味を持つ。

一方、大森一彦は「著作文献目録」が整備されること

によって、「随筆が最初に発表されてから本になるまでの編集プロセス」や「発表メディアの機能と種類」などを見て取ることが可能になり、対象とする著者の資料の生産と流通のメカニズムを具体的に分析することができるようにと述べている<sup>5</sup>。同時に「参考文献目録」の機能については、参考文献は対象とする人物の影響度に応じて生産量に変化し、影響力が大きければ限りなく増加するものと指摘している。谷沢や大森の指摘は、ともに書誌を文学研究に積極的に利用しようとする意向が感じられる。

具体的に個人書誌を考えてみると、例えば実際に筆者が研究対象としてきた三浦綾子の場合、収録内容が出版物の書誌事項の記載に限定されていない年譜のようなものではなく、書誌事項のみを収録対象とした「目録」という言葉を明確に使用した書誌としては、現在では4種類存在することが確認できる。刊行年が古いものから順に並べると、以下ようになる。

- [A] 朝日新聞社編集部編による『三浦綾子作品集 第18巻<sup>6</sup>』巻末所収の「著作目録」「参考文献目録」
- [B] 村田和子編による『三浦綾子全集 第20巻<sup>7</sup>』巻末所収の「年譜・著作目録」
- [C] 東延江編著による『三浦綾子随筆書誌<sup>8</sup>』所収の「全著作目録」「作品収載著書目録」「序文・帯・その他の目録」「三浦綾子関係評論集目録」
- [D] 岡野裕行著による『三浦綾子書誌<sup>9</sup>』所収の「著書目録」「初出目録」「参考文献目録」

『氷点』(1964年)を始め、多くの作品がベストセラーとなって現在にまで読み継がれ、没するまで約35年のキャリアを持った三浦綾子であるが、書誌と呼べるものは意外に少なく、4種類のみとなっている。[A]や[B]のように、全集の類の書物が刊行される機会にその一部として収録されるケースが多いのは、そういった書物には書誌を収録することが必須と見なされていることであろうが、逆に言えば、従来個人書誌というものは、そのような機会にしか作成される機会がほとんどなかったことも示している<sup>10</sup>。

しかし、このような全集の一部としての扱いではなく、また冒頭で述べたように[D]のような作家研究の一環として作られるわけでもなく、近年[C]のように文学館という施設の建設にともなって作成されるというケースが見られるようになった<sup>11</sup>。

## 1.2 研究目的

もちろん、三浦綾子記念文学館との関連でいえば、[D]の作成に際しても同様のことが言え、その作成過程においては、三浦綾子記念文学館所蔵の資料に頼った部分が非常に大きい。例えば[D]所収の「著書目録」の作成においては、単行本の帯に記載された文章まで収録することをその方針としたが、帯というものは、図書館はもちろん、古書店や新刊書店でも多少古いものとなると保存されていないことがしばしば見受けられるものであり、そういった失われがちな情報の調査は難しいものである<sup>12</sup>。だが三浦綾子記念文学館に所蔵されていた資料は、ほとんどが発行当時のまま、帯も付属した状態で保存されていたため、そういった手に入りにくい貴重な資料を確認することができた。同様に、「点字本」や「翻訳」などの一般的な流通ルートに乗りにくい資料の現物確認も、三浦綾子記念文学館の資料に頼った部分が大きかった。一方、「参考文献目録」においては、地元旭川の神楽公民館が発行している「三浦綾子百科シリーズ」などの地方出版物、また、「初出目録」においては、「郷土誌あさひかわ」などの地方誌、キリスト教関連のトラクト（宗教上のパンフレットのこと）など、三浦綾子記念文学館の所蔵資料によって現物の確認が取れたケースを数多く経験している。もし三浦綾子記念文学館が無ければ、こういった現物の存在すら知らないまま書誌を作成していたことになったであろう<sup>13</sup>。

では果たして三浦綾子についての個人書誌の作成には、三浦綾子記念文学館がどの程度重要な役割を果たしてきたのだろうか。本稿では、先に挙げた三浦綾子に関する4種類の個人書誌に収録されている書誌データ数を分析することによって、文学館と個人書誌作成とがいかに関係しているかについて、一つの事例を提示してみたい。

## 1.3 先行研究

大森一彦は、寺田寅彦に関する個人書誌作成の実体験を踏まえながら、文献探索の方法を「大森の方法」として10項目にまとめている<sup>14</sup>。この「大森の方法」は、個人書誌を作成する際に、既存の書誌には収録されていない新たな書誌データを得られる調査方法を示しているものであり、寺田寅彦を対象とする場合に限らず、どのような著者の書誌を作成する際にも適用できる普遍性を持つものとしてまとめられている。

また、大森は「大森の方法」をまとめる以前に、寺田寅彦に関する文献の入手経路を表にまとめている<sup>15</sup>。ここでは寺田寅彦に関する367件に及ぶ書誌データ数を、

「先行文献目録の利用」や「周辺人物の書誌の利用」、「新刊情報のレビュー」などの情報入手経路ごとにカウントし、こういった入手経路からの割合が多いのかをパーセンテージで示している。大森による文献探索の区分は、以下のような4種類になると考えられる。

- 〈ア〉対象とする著者に関する先行する書誌の利用
- 〈イ〉対象とする著者以外の先行する書誌の利用
- 〈ウ〉書誌作成者の独自の調査による文献探索
- 〈エ〉書誌作成者以外の者からの報告

大森の報告によれば、〈ア〉は全体の14%、〈イ〉はわずかに4%、〈ウ〉が一番多く52%を占め、〈エ〉は30%との結果が出ている。大森による書誌データの入手先を数値によって裏付けするという「大森の方法」の手法は、新たな書誌データの入手先は、既存の先行する書誌に頼るだけではなく、その先行する書誌を超える視点を持つ必要があるという指摘を、具体的な数字を提示することで客観的に判断可能としている点に特色がある。当然ながら書誌というものは、先行する書誌に収録された書誌データをなぞるだけでは意味がなく、そこに編者による新しい発見を追加しなければならない。すなわち、〈ウ〉の割合が高ければ高いほど、その書誌の果たした役割は重要なものと評価できる。

本稿における考察は、大森のように書誌データ数をカウントし、その数値を比較するという方法に倣いたい。

## 1.4 本稿における用語の定義

「目録」と「書誌」は混同されがちである。図書館情報学においては、「書誌」はタイトル、著者名、出版者などの書誌データの提供を目的とし、「目録」はさらに所在情報の提供を行うものとされている<sup>16</sup>。だが文学研究においては、「書誌」と「目録」とが混同して使われることも多く、しばしば所在情報が欠けているものも「目録」と呼んだりすることがある。

本稿では文学研究の呼び名に倣い、単に「目録」と言ったときは、ある特定の作家が図書の形態で刊行した著作物の一覧を意味する「著書目録」、ある特定の作家が発表した文章（小説、エッセイ、対談などの別を問わず）の初出誌（紙）の一覧を意味する「初出目録」、ある特定作家に関する第三者による文章（作家論、評論など）の一覧を意味する「参考文献目録」のいずれかを指し示し、「書誌」はそれら3種類の「目録」を総称するときの呼称とする。また、本稿において単に「書誌」と言った場合、「個人書誌」を意味することとする。

## 1.5 研究方法

前述した「大森の方法」の区分は、それぞれ次のような視点で区別されているものと考えられるだろう。

- ・先行する書誌に

収録済み……………	〈ア〉〈イ〉
未収録……………	〈ウ〉〈エ〉

- ・書誌の収録対象とする範囲が

対象とする著者のみ……………	〈ア〉
対象とする著者以外を含む……………	〈イ〉

- ・新規書誌データの発見者が

書誌作成者本人……………	〈ウ〉
書誌作成者以外……………	〈エ〉

先に1.2において、本稿では個人書誌と文学館との関連について考察すると述べた。これを「大森の方法」との関連で考えるならば、〈イ〉や〈エ〉についての考察は本稿で扱うべき範疇から外れることになる。ここでは〈ア〉のように、ある特定の作家を対象とする書誌を対象とし、なおかつ〈ウ〉のように、書誌作成者自身が、先行する書誌に未収録の状態にある、新たな書誌データを発見するケースを考えることになる。

具体的には、まず「大森の方法」の〈ア〉に相当する書誌データ数を、[A]～[D]それぞれの目録から抽出することから始まる。ただし、[A]や[B]は、[D]における「著書目録」「初出目録」に相当する書誌データが、年ごとに混在した表記となっているため、まずはその混在した書誌データを、他の書誌と比較可能なように再編集する必要がある。本稿では[D]における「著書目録」「初出目録」「参考文献目録」という3種類の目録に分ける方法に統一して考えていきたい。そのため、[A]～[C]に収録されている個々の書誌データを、筆者の考えに基づいて、[D]における「著書目録」「初出目録」「参考文献目録」のいずれかに相当するように、逐一判断したうえで再編集を行った。

ただし、[A]～[D]のいずれも、何らかの雑誌や新聞で連載され、その後に図書として刊行されたような作品、すなわち「連載小説」に関しては、「著書目録」と「初出目録」のいずれにも記述する体裁を取っているが、雑誌や新聞への掲載がないままに、最初から図書として刊行された、いわゆる「書下ろし」の形式で刊行された作品<sup>17</sup>の書誌データの扱いは、各書誌で異なっているた

め、本稿におけるデータ集計の方針を、以下のように明確にしておく。

[A]～[C]では、それら「書下ろし」の書誌データは、「著書目録」の書誌データを記述することで初出情報の提供も兼ねた記述方針であり、改めて「初出目録」に別途収録するという作業をしていない。しかし、[D]ではそういった「書下ろし」の書誌データは、あえて「著書目録」と「初出目録」の両方に収録するという方針を取っている<sup>18</sup>。そのため本稿では、このような「書下ろし」の作品についての書誌データは、各書誌が「著書」と「初出」の意味を明確に意識した上で記述を行っているかということを重視し、[D]において「著書目録」「初出目録」の両方に収録された「書下ろし」の書誌データは、[A]～[C]については「著書目録」のみに掲載されたものとして取り扱っている<sup>19</sup>。

以上のように[D]の方法に統一することによって、各書誌に収録されている書誌データ数を、同じ基準でもって比較することが可能となる。

このような書誌データの再編集を行った後、[A]～[D]それぞれに収録されている書誌データ数をカウントする。その結果を、文学館開館以前の書誌である[A][B]、開館以後の書誌である[C][D]の前後で、どの程度書誌データの数に違いが見られるかを比べ、その数値を元に考察を行うこととする。

## 1.6 研究対象

すでに述べてきたとおり、本稿では三浦綾子の4種類の書誌を扱い、それと文学館との関係を考察対象とするが、一般に文学館は対象とする作家の数や、時代、地域などの差により、大きく三つのレベルに分けられると考えられる。一つは、日本近代文学館や神奈川近代文学館などのように、時代や地域に限定せず、日本の近・現代文学に関する資料を収集している「総合文学館」、二つ目が、北海道立文学館や石川近代文学館などのように、ある特定地域に関わる文学資料を収集している「地域文学館」、そして三つ目が、ある特定の作家に注目して、その人物に関する資料の収集を行う「個人文学館」（「文庫」と称するものも含む）である<sup>20</sup>。ここではこのうちの「個人文学館」を対象とし、その中でも「三浦綾子記念文学館」のみを事例として考察を行うことになる。数ある文学館の中のたった一館のみを取り上げるようになるため、非常に狭い範囲の議論となるが、この事例は今後の文学館の在り方を考える上での参考となることを期待するものである。

## 2. 三浦綾子に関する個人書誌における書誌データ数

さて、三浦綾子に関する4種類の書誌 [A] ～ [D] それぞれに関して、[D] における「著書目録」「初出目録」「参考文献目録」の3種類の目録に相当する書誌データ数が算出されるように、その収録件数を合計してみると、次の表1のようになる。

表1 三浦綾子に関する個人書誌に収録された書誌データの件数

	[A]	[B]	[C]	[D]
「著書目録」に相当する書誌データの件数	129	220	422	583
「初出目録」に相当する書誌データの件数	379	596	1,693	1,967
「参考文献目録」に相当する書誌データの件数	224	0	20	719

(単位：件)

この表1を見てみれば、「著書目録」「初出目録」共に、新しい書誌が作成されるたびに書誌データ数が着実に増加していることがわかる。新しい書誌は、常にそれ以前の書誌の提示した書誌データ数を超え、新たな発見を付け加えていることが見てとれる。

ただし、「参考文献目録」に関しては書誌データ数が刊行順に増えておらず、書誌ごとの収録数に明らかに違いが見られる。それゆえに書誌データ数の比較による考察を行うことはできないため、本稿において「参考文献目録」の言及はしない。しかし、谷沢永一が「文献目録の反省期<sup>21)</sup>」の冒頭で言及している通り、文学研究に先行研究(参考文献)は必須のものであることは自明なことであるが、三浦綾子の書誌に関する限り、[B]の収録対象に「参考文献目録」が入っていないことや、[C]は単行本化された文献のみ収録となっていることなどから、編者にその重要性があまり認識されていなかったと考えられる。

### 2.1 「著書目録」における書誌データ数の推移

ではまずは表1の「著書目録」から見ていきたいが、それぞれの収録対象となる資料の範囲を明記しておくと、[A]と[B]は、「単行本」「文庫本」「全集」「翻訳」の4種類の資料を収録対象とし、同様に[C]は、「単行本<sup>22)</sup>」「作品収載著書目録<sup>23)</sup>」「序文・帯」の3種類、

[D]は、「単行本」「作品集／全集／選集」「文庫本」「共著／対談／インタビュー」「編著」「写真集」「大活字本」「文学全集」「寄稿エッセイ」「点字本」「音声出版物」「映像出版物」「翻訳」の13種類の資料を収録対象としている。

まず[A]は三浦綾子に関する最初の書誌であるから、[A]の編者が独自の調査で把握した書誌データの全てが収録されているものと考えられ、「大森の方法」の分類に従えば、全ての書誌データがくウのケースに相当するものと位置付けられる。もっとも[A]の凡例を読んでみれば、三浦綾子に関する最初の個人書誌は、三浦綾子自身が書き留めておいた記録に基づいていることが明らかにされている<sup>24)</sup>。つまり[A]刊行当時における書誌データ数は、三浦綾子本人が把握していた書誌データ数にほぼ等しいわけである。後に[C]や[D]によって大幅に書誌データの追加が成されることを考えると、著者本人の記録が必ずしも充分なものとはならないことがわかる。

[B]は[A]を元にした書誌であるため、[A]の刊行年である1984年までは、書誌データ数にほとんど違いは見られず、内容もまったく一緒であるが、それでも[B]が[A]の約1.7倍( $220 / 129 \approx 1.71$ )となる書誌データ数を収録しているのは、[A]刊行以降の書誌データを補足するように収録しているためである。[B]の時点での新規の書誌データ数は、[B]の総数から[A]の総数の差を取った値、すなわち[A]が刊行された1984年から[B]の刊行された1993年までの間の書誌データ数と等しく、その件数が $220 - 129 = 91$ 件であることを示している。つまり[B]においては、59%( $129 / 220 \times 100 \approx 58.6$ )がくアに相当し、41%( $91 / 220 \times 100 \approx 41.4$ )がくウに相当することになる。

収録対象に注意を払いながら、同様の手順を[C]と[D]にも適用した結果<sup>25)</sup>を表にまとめると、以下の表2のようになる。

表2 三浦綾子に関する「著書目録」における「先行する書誌への依存の割合くア」と「独自の調査で追加した書誌データの割合くウ」

	[A]	[B]	[C]	[D]
先行する書誌への依存の割合くア	0%	59%	35%	72%
独自の調査で追加した書誌データ割合くウ	100%	41%	65%	28%

ここで注目すべきは、[C]におけるくアの割合の

小ささであろう。[B] や [D] が、それぞれ 59%, 72% の割合で先行する書誌に収録されていた書誌データに依っていたものが、[C] に関しては、先行する書誌に収録されていた書誌データ数の割合は、わずか 35% しかない。これらの数値はすなわち、三浦綾子記念文学館が建設されたことによって、その所蔵する資料を元に [C] が作成されたことを裏付ける結果であることにほかならない。

## 2.2 「初出目録」における書誌データ数の推移

もうひとつ表 1 の結果から、「初出目録」についても見ておきたい。ここでも特筆すべきは、[B] と比べたときの [C] であり、約 2.8 倍 ( $1693 / 596 \approx 2.84$ ) という書誌データ数を収録していることである。[A] と比べたときの [B] が約 1.6 倍 ( $596 / 379 \approx 1.57$ ) となっているのは、「著書目録」の理由と同様、[A] 刊行後の書誌データを補足しているからであり、[C] と比べたときの [D] が約 1.2 倍 ( $1967 / 1693 \approx 1.16$ ) であることを考えても、[C] の書誌データ数の増加は著しいものがある。このことはすなわち、前述の「著書目録」と同様に、「初出目録」に関しても、[B] と比較したときの [C] が最も書誌データ数を増加させていることを示しており、「初出目録」もやはり [C] の存在が大きい意味を持っていることが数字上から確認できる。つまり [C] が刊行されたおかげで、[B] のように「全集」と銘打たれた書物に収録された書誌ですら、実は三浦綾子の活動の 3 分の 1 ほどの書誌データ数しか収録していなかったことが明らかにされたわけである。

では先ほどの「著書目録」と同様に、先行する書誌への依存の割合〈ア〉と、独自の調査で追加した資料の割合〈ウ〉を算出し、その結果を表 3 に示した。「著書目録」と同じく、[A] はその全てが〈ウ〉に相当する書誌データと見なし、それ以降の書誌については、先行する書誌に掲載された書誌データは、それを参照したもの（と見なした。）

表 3 三浦綾子に関する「初出目録」における「先行する書誌への依存の割合〈ア〉」と「独自の調査で追加した書誌データの割合〈ウ〉」

	[A]	[B]	[C]	[D]
先行する書誌への依存の割合〈ア〉	0%	64%	35%	86%
独自の調査で追加した書誌データ割合〈ウ〉	100%	36%	65%	14%

やはり [C] の割合は、[B] や [D] とは明らかに異なっている。〈ウ〉の大きさから判断すれば、「初出目録」においても、三浦綾子記念文学館が作られる機会に、それまで公にされていなかった資料が [C] の調査によって続々と表に出てきたことが理解でき、文学館の資料整理を行うことが、書誌作成にいかに大きな影響を与えるのかを感じとることができるだろう。三浦綾子記念文学館には、三浦綾子本人の所蔵資料が多数寄贈されているわけであるが、[C] によって追加されたデータ数を考えると、それらの資料は [A] や [B] の作成時点では、その大多数が完全に死蔵されていた資料であったわけである。著者本人の所蔵資料といえども、文学館が作られる機会に改めて調査がなされると、公にされていなかった資料がいかに多いのかが分かる値である。

## 3. 書誌に収録すべき資料の差異の指摘

[C] がそのような独自の調査を可能とした背景には、すでに述べてきたように、三浦綾子記念文学館の存在が大きく関わっているということは明白である。表 3 のように、[C] において「初出目録」の書誌データ数が増加したのは、それまで誰も公にしてこなかった資料の存在を数多く指摘できた（文学館に寄贈された資料を確認した）ことが大きい。しかし、表 2 の結果に表れているように、[C] の「著書目録」もかなりの割合で書誌データ数を増加させている。「著書目録」とは雑誌や新聞の記事を採録するものではなく、図書の形態で刊行された資料を収録対象とするものである。図書の刊行がわずか 7 年で倍ほどに膨れ上がるものであろうか？ たとえ文学館が建設されたという事情を考慮したとしても、それでも [C] の「著書目録」が、[A] や [B] に比べて格段に書誌データ数を増加している理由は何なのであろうか？

その答えは、例えば [C] の「著書目録」が、その収録内容に「作品収載著書目録<sup>26)</sup>」という、それ以前の書誌には存在していない独自の項目を、新しく提示していることにある。ここには 121 件の書誌データが記述されているのだが、この項目が追加されることで、[C] における「著書目録」の収録書誌データ数が大幅に増加する結果となったのである。この項目を書誌に収録しようとする方針を立てたのは、三浦綾子に関する書誌では [C] が最初であり、[A] や [B] の編纂時にはまったく気に留められていなかった。つまり [A] や [B] の編者は、三浦綾子の「著書目録」を作成する際に、以下のような四つの着眼点しか持っていなかったことが分か

る。

- (a) 三浦綾子の単著による単行本
- (b) 三浦綾子の単著による文庫本
- (c) 三浦綾子の単著による全集
- (d) 三浦綾子の単著による翻訳

おそらく [A] や [B] の編者は、「著書目録」とは「単著」による資料でなければならないという既成観念にとらわれていたものと思われる。これに対し、[C] は次のような資料も「著書目録」に含まれるものと判断し、新しい解釈を取り入れたわけである。

- (e) 随筆・写真・小説集の中に三浦綾子作品が収載されている図書

この部分に、「著書目録」に対する認識の変化が見受けられる。(e) はそれまでの [A] や [B] のような書誌では見落とされてきた資料であるが、この着眼点に気が付いたのは、既に先行する書誌が2種類存在していたにも関わらず、改めて同じ主題の書誌を作成しようとした [C] の編者である東延江が、それ以前の書誌を超える付加価値を新たに付け加えようと試みた結果であろう。個人書誌に収録すべき資料は、何も「単著」に限らなくても良い、という実に単純なことなのだが、これは気が付いた後だからこそ、そのように簡単に言えるのであって、[A] や [B] の編者が気付かずに放置していた資料を指摘し、項目を増やした(資料の違いに気付いた)ことは、「著書目録」「初出目録」において多数の書誌データを明らかにしたこととともに、[C] のもう一つの功績であると言える<sup>27</sup>。

もちろん、他の作家で考えてみれば、これまでもこのような一部収録の目録などは作成されていたわけであるから、こういった項目の概念自体は、東延江が新たに作り出したものではない。そもそも作家研究(文学研究)にとって、随筆集や小説集などの合集に一部収録されることの意味(他の作家たちとの関係の縮図であり、その時代における評価に関わるものである)の考察は重要であるから、作家の活動の全体を書誌データとして示そうと考えるならば、必然的に言及せざるを得ない項目となるはずである。[C] は、そういった作家研究の常識に基づくようになったということであろう。

#### 4. 現物に始まる書誌作成

##### —資料の分類と書誌における項目—

繰り返すが、東延江がこのような着眼点を見出した背景には、三浦綾子記念文学館の所蔵資料の影響があるものと推測できる。つまり書誌の作成を行う以前に、そういった資料が所蔵されていたがゆえに、[C] に収録すべき資料であると気付いたということであり、資料の現物があってこそその結果であると考えられる。当然ながら、項目は現物の資料に即して立てられるべきであり、普通は資料に先行する項目立てなどありえない。

「大森の方法」は既存の目録に頼らない文献探索の重要性を指摘していたが、その方法は引用文献の追跡や著作物からのヒントなど、基本的に芋蔓式に未発見の文献を探すというものであった。一方の東延江による調査は、既に集められていた文献を整理する作業の結果が中心といえることができる。つまり「大森の方法」に見られるような文献調査とも異なり、三浦綾子に関する現物の資料が調査対象として文学館に寄贈されたことから、直接に資料を見出すことができたわけである。

[D] の「著書目録」において、筆者が「大活字本」や「点字本」などの項目を用意しえたのも、現物の資料を目の当たりにしたからに他ならず、それが13もの小項目に分類することになったのも、最初から13の項目を用意していたわけではなく、調査を進めるうちに新たな資料が発掘され、項目を増やす必要性を感じたからである。例えば、筆者は「単行本」と「大活字本」を別項目として立てたが、これを思いついたのは、三浦綾子記念文学館で実物の資料を見たからであり、これがもし現物を見ることができずに、コピーしか入手できなかったとしたならば、その資料ごとの差異に気付くことができなかったかもしれない。つまり現物を見ることで資料ごとの特徴をより鮮明に把握することができたわけである。このことは、現物の資料が書誌の項目立ての変更にまで影響を及ぼすということを示している。

書誌における項目立て、すなわち資料をどのように分類していくかについては、書誌データの記述とともに、編者の意向を反映できる部分であり、完成後の書誌の使い勝手に影響してくる重要な部分である。目録における分類の重要性については、谷沢永一が「書誌学の課題<sup>28</sup>」で述べているが、資料をどのように分類するかを考えるときには、完成後の書誌の全体像を想像し、目の前にある資料がどの資料と同じ性質を持つのか、あるいは異なる性質を持つのかを、個々の資料について考える必要がある。

図書館による調査で個人書誌を作る場合、一館で必要な資料を得ることは難しいため、必然的に様々な図書館から少しずつ資料を収集することになる。だが、このよ

うな地道な調査だけでは、完成後の書誌の全体像を把握することは難しい。そのため、新しい資料の発見に伴って項目が増えたりした場合、一度作成した書誌を再編集する必要もでてくるかもしれない。そういったとき、三浦綾子記念文学館のように目的とする資料が一カ所に集まる場所があると、資料群の大まかな全体像を把握することが可能となる。これは、あらゆる資料を幅広く収集するという方針の図書館のような機関では持ちにくい、文学館の大きな特徴であると考えられる。

## 5. 文学館の果たす役割

### —三浦綾子記念文学館の事例から—

さて、では三浦綾子記念文学館が建設されたことによって、個人書誌の作成にはいかなる貢献がなされたかをまとめてみたい。三浦綾子の事例からは、文学館の役割として以下のような点が指摘できるだろう。

- ① 資料の保存を行う。
- ② 資料の公開を行う。
- ③ 資料の収集を行う。
- ④ 所蔵資料に基づき、新たな個人書誌の作成を促す。
- ⑤ 現物を元に資料ごとの差異を際立たせ、項目立てへの参考を与える。

⑤の意義については4で述べたため、ここでは①から④について簡単に述べておきたい。

まずは①のように、三浦綾子記念文学館が作られることによって、三浦綾子本人が所蔵していた資料の受け入れ先ができたことが重要である。つまり資料の保存場所としての機能を有するわけである。また、文学館はそもそも資料を半永久的に保存する目的で作られるものであるから、所蔵されている資料を破棄することは、まず考えられない。例えば収蔵庫の問題などにより、図書館では捨ててしまうような本の箱やカバー、雑誌のバックナンバーなども、文学館にとっては貴重な資料となり、保存の対象となる。もちろん図書館と同じく、文学館にも収蔵庫の問題があるが、これはこれでまた別の議論が必要である<sup>29</sup>。

次に②のように、三浦綾子の所蔵していた資料が本人の手元を離れ、建前上は誰でも閲覧することが可能になったことは大きい。資料が名目上公になっていることは、資料の死蔵を防ぐ意味では重要である。もちろん、何の後ろ盾もない在野の研究者などが、閲覧から締め出されることは充分考え得ることであり、貴重資料閲覧が

誰にでも平等に行われているとは考えにくい。例えば有名な研究者にしか公開を許可しないようなことは、文学館の姿勢として本来あってはならないことであり、公開の仕方を変えることで解決する部分もあると思うが、このような資料公開の差別の問題も、また別の議論が必要である。

③については、三浦綾子記念文学館ができたことで、開館の時点で三浦綾子が所蔵していた資料だけではなく、その後文学館が収集した資料が追加され、また外部からも資料の寄贈が促進されることによって、一カ所に集中して管理されるようになったことが指摘できる<sup>30</sup>。文学館一般について敷衍すると、つまり文学館という建物は、当初は対象とする作家に関連する資料を保存する目的で建設されるものであるが、一度建設されると、その意図を超えて、資料収集の機能を持つようになる。文学研究はもちろん、個人書誌作成にはこの文学館の持つ資料収集機能が大いに活用できる。

さらに④であるが、[C]の書誌がそうであるように、三浦綾子記念文学館に寄贈された資料を整理していく中で、新たな個人書誌を作成するという切っ掛けを与える機能も忘れてはなるまい。つまり文学館に現物の資料が大量に存在しているがゆえに、それを把握する目録を作る必要性があり、その作業の結果が、何らかの機会に刊行されるときに個人書誌として結実するわけである。文学館が無くとも個人書誌は作れるが、文学館が作られることで、より充実した個人書誌作成の土壌ができるといえるだろう。

## 6. 文学館と個人書誌との関係における問題点

ただし、問題もいくつか残る。

まず一つは、文学館はそれぞれの館がユニークな事例であるということである。三浦綾子記念文学館は、[A]や[B]の書誌データ数を3倍にするほどの[C]の作成に大きく貢献したが、こういった書誌を作れるだけの環境が整っている三浦綾子記念文学館は、文学館全体から言うと特殊な事例ではないのだろうか。例えば森鷗外の文学館に関しては、東京都文京区の「鷗外記念本郷図書館」、東京大学図書館内の「鷗外文庫」、北九州市の「森鷗外旧居」、島根県津和野町の「森鷗外記念館」のように、各地に分散している。「鷗外記念本郷図書館」は、『森鷗外資料目録<sup>31</sup>』を刊行しているが、これは館が所蔵している資料しか収録していないため、他の文学館が所蔵しているその文学館独自の資料に関しては収録されないことになる<sup>32</sup>。とすると同じ作家を対象にした文学館が

複数存在する場合、どうしても所蔵資料に偏りが出てくるはずである。作家の生家などを文学館として転用する場合などは、文学に関わる以外の資料（衣類、ペン、机、など）が存在することがあり、それを中心にしている場合もある。つまり一口に文学館とは言っても、書誌作成に深く関係する館とそうでない館が存在する。

また、[C]の「参考文献目録」が、単行本に限定されていたことから分かるように、三浦綾子記念文学館の所蔵資料には、参考文献の所蔵が少ない。そのため、「参考文献目録」の作成が促されない状況があった。これは文学館自身が作家顕彰の意味合いを多分に持っており、近代文学研究に寄与するという意識が希薄であるためであろう。館報を見れば、近年発行された参考文献に関しては寄贈がなされているため、ある程度資料が集まっているようだが、大事なものはそれが整備され、利用可能な状態になっているか否かである。作家研究の中心としての機能を果たすためには、館としてこういった方面へ力を注ぐべきである<sup>33</sup>。

もう一つは、文学館といえども、全ての資料が揃っているわけではないということである。これは個人的に[D]を作成した経験からも言えるし、[C]の「あとがき」にも図書館などを通じて各機関から資料を収集した旨が書かれていることから推察できる。これは文学館が完璧には資料を保存していないことの証拠となるだろう。文学館が作家研究の中心施設となり、文学研究へ寄与するためには、少なくとも文学館が所持していない資料については、そのコピーだけでも揃うようにすべきであろう。とはいえ、現状においては、書誌作成における文学館での現物調査は、その方法の一つと考え、「大森の方法」で指摘されているような地道な文献探索も必要となることを忘れてはならない。

## 7. おわりに

本稿では三浦綾子に関する事例のみの言及となったが、いずれは他の作家を対象とした文学館の場合はどうなるのかも考える必要があるだろう。例えば、文学館が建設されている作家とそうでない作家とでは、どの程度差があるのか、あるいは、既に文学館が建設されている作家ならば、それが建設される以前と以後では、どの程度書誌データ数に変化が見られたのかなど、他の事例を元に考察することによって、文学館が個人書誌作成へ寄与する部分、さらにはそれを通じた近代日本文学研究にいかに関与するのかを明らかにすることができるだろう。

また、「大森の方法」の〈イ〉や〈エ〉の考察は、文学館との関連で個人書誌を捉えようとする本稿の目的から外れるために言及しなかったが、例えば〈イ〉に関しては、現在利用可能なデータベースや目録において「三浦綾子」というキーワードで何%の書誌データが検索されるか、などの調査を行うことで明らかにすることができると考えられる。こういった冊子体ではなく、データベース化された検索ツールの考察もいずれ必要と思われるが、このような問題についても今後の課題としたい。

- 1 浦西和彦は、先に述べた『人物書誌体系』シリーズでも、「徳永直」（第1巻）、「谷沢永一」（第13巻）、「葉山嘉樹」（第16巻）、「武田麟太郎」（第21巻）の作成に携わっており、書誌学の先導者の一人となっている。
- 2 勉誠出版からは、1995年に『太宰治全作品研究事典』が刊行されたのを皮切りに、1998年には『松本清張事典』『川端康成全作品研究事典』『柳田國男事典』が、2000年に入ると『辻空・折口信夫事典』『芥川龍之介全作品事典』『夏目漱石事典』『島尾敏雄事典』『三島由紀夫事典』などが相次いで刊行され、翌2001年には『堀辰雄事典』、さらに2002年には『芥川龍之介大事典』、2004年の『松本清張事典』『太宰治大事典』と、一連の事典シリーズが刊行されており、拙著もその流れのひとつと位置付けられる。
- 3 黒古一夫。「書誌学」の可能性。図書館情報大学研究報告, vol.18, no.1, 1999, p.79-88. 参照は, p.83-85.
- 4 谷沢永一。「編集者と著者との雑談」。書誌学的思考: 日本近代文学研叢。東京, 和泉書院, 1996, p.819-858.
- 5 大森一彦。「中谷宇吉郎の資料とその目録」。文献探索2004. 深井人詩編。東京, 文献探索研究会, 2004, p.243.
- 6 朝日新聞社編集部編。「著作・参考文献目録」。三浦綾子作品集 第18巻。東京, 朝日新聞社, 1984, p.321-348.
- 7 村田和子編。「年譜・著作目録」。三浦綾子全集 第20巻。東京, 主婦の友社, 1993, p.391-562.
- 8 東延江編。三浦綾子随筆書誌。自家版。旭川, 2001, 115p.
- 9 岡野裕行。三浦綾子書誌。東京, 勉誠出版, 2003, vi, 321p. 監修は, 黒古一夫.
- 10 もちろん古くは瀧田貞治による『逍遙書誌』（1937年）、入江春行による『与謝野晶子書誌』（1957年）

などがあるが、その数はそれほど多くはない。また、日外アソシエーツや勉誠出版のようなシリーズものとは異なり、他に関連する図書の刊行はない。つまりこの頃の個人書誌は、ある意味で特殊な図書だったことが伺える。

- 11 [C] の編者である東延江という人物は、三浦綾子記念文学館が建設されている旭川市在住の人物であり、館内に深く入り込んで調査をした（というよりも建設にあたって寄付された三浦綾子本人所蔵の資料をまとめ上げた）人物である。つまり [C] の作成のきっかけには、三浦綾子記念文学館の存在が大きく影響を及ぼしているわけである。東延江が文学館開館前の資料調査に関わっていたことが分かる資料には、例えば『雨はあした晴れるだろう』（1998 年）所収の三浦綾子による「あとがき」に、「『三浦綾子記念文学館』のための資料調べが始まったのが一九九六年六月で、早くも二年になろうとしている。この二年間に、私に関する記録や資料が正に虱つぶしに点検されてきた。いずれもボランティアの人たちの奉仕で、中でも松野郷延江（詩人＝筆名・東延江）さんは、終始全力を注いでこれに当たってこられた」という記載があることからわかる。尚、三浦綾子記念文学館の開館年月日は、1998 年 6 月 13 日である。
- 12 例えば日本近代文学館が編集した『名著初版本複製 太宰治文学館』（1992 年）が刊行された際、存在は多くの研究者が様々な資料から確認していながら、「実物」が見つからず（所持している研究者が公開を拒否し）、1 冊だけ太宰自身が書いたとされる帯文を複製することができなかった、という事例がある。
- 13 例えば筆者は、[D] において「大活字本」に分類されている『泉への招待』全 4 巻（1985 年）の存在を、国立国会図書館の NDL-OPAC によってその存在を知ったが、三浦綾子記念文学館における調査によって、同書に 1993 年発行の異版（全 4 巻）があることを初めて知った。この異版は NDL-OPAC では検索されず、現時点で現物の確認が取れているのは三浦綾子記念文学館所蔵のものだけである。
- 14 大森が提示した「大森の方法」とは、以下の通りである。
  - (1) まず先行文献目録から批判的に摂取すること。
  - (2) 関連論文の引用文献を追跡してみる。
  - (3) その人物の著作物からヒントを得ること。
  - (4) その人物が扱ったものと同一テーマの文献に注

意すること。

- (5) その人物の交遊圏から執筆者群を推定すること。
  - (6) 隣接する個人書誌を通覧すること。
  - (7) 関連雑誌を網羅的に調査すること。
  - (8) 地方出版物に注意を払うこと。
  - (9) その人物ゆかりの人に会い教示を得ること。
  - (10) 文献調査をするばかりでなく自らも文献を生産する側にまわってみること。
- 参照は以下の文献による。
- 大森一彦. 個人書誌における文献探索：寺田寅彦を例として. 書誌索引展望. vol.5, no.2, 1981, p.10-13.
- 15 大森一彦. 昭和女子大学『近代文学研究叢書』40「『寺田寅彦』資料年表」の分析と批判. 国文学. no.51, 1975, p.64-72.
  - 16 日本図書館学会用語辞典編集委員会編. 図書館情報学用語辞典. 第 2 版. 東京, 丸善, 2002, vii, 273p. 参照は, p.108,229.
  - 17 三浦綾子の「書下ろし」には、『岩に立つ』（1979 年）や『母』（1991 年）などがある。
  - 18 つまり同じデータを重複して収録していることになるが、これは「著書目録」というものは「図書」の形で刊行された全ての書誌データ（著書）を、また、「初出目録」は発表の媒体（図書、雑誌、新聞）を問わず、各作品が最初に世に出された年月日（初出）を、時系列という規則に従って羅列すべきという筆者の書誌作成の方針によるものであり、それぞれの役割を明確に意識した結果である。
  - 19 多少の不公平感があるかもしれないが、それぞれの書誌の記述方針や、実際に記述されているその内容に厳密に従うことが、本来、最も公平な取り扱いであると考えられるからである。
  - 20 木原直彦による『全国文学館協議会会報 第 24 号』（2003 年）所収の「全国文学館等一覧表」によれば、日本全国に大小合わせて 540 館の文学館があることが確認されている。
  - 21 谷沢永一. “文献目録の反省期”. 書誌学的思考：日本近代文学研叢. 東京, 和泉書院, 1996, p.661-665.
  - 22 ただし、[D] ではこの項目を、さらに「単行本」と「写真集」「共著／対談／インタビュー」に細分している。
  - 23 [D] においては、「寄稿エッセイ」と呼んでいる。
  - 24 [A] の凡例には、「著作目録の作成にあたっては、著者の記録をもとに、編集部がこれをまとめ、関西

学院大学の水谷昭夫氏のご教示を、海外翻訳目録については、青山四郎氏のご協力をえました。」との記述がある。

<sup>25</sup> [C]に収録された書誌データのうち、106件が[B]にも掲載されていることから、[C]の新たな発見は $301 - 106 = 195$ 件となることが言える。よって[C]における〈ア〉は $106 / 301 \times 100 \approx 35\%$ 、〈ウ〉は $195 / 301 \times 100 \approx 65\%$ となる。同様に[D]における新発見は $583 - 422 = 161$ 件であるから、[D]の〈ア〉は72%、〈ウ〉は28%となる。

<sup>26</sup> [C]の凡例には、「随筆・写真・小説集の中に三浦綾子作品が収載されているもの」との説明がある。

<sup>27</sup> このような収集する資料の範囲を拡大する(資料の存在に気づき、「著書目録」に収載していく)作業は、[D]においても行われている。三浦綾子に関する「大活字本」「点字本」「音声出版物」「映像出版物」などは、[D]が最初に言及した書誌であり、それ以前の書誌には見られなかったものである。

<sup>28</sup> 谷沢永一、「書誌学の課題」．書誌学的思考：日本近代文学研叢．東京，和泉書院，1996，p.701-725.

<sup>29</sup> 全国文学館協議会が発行する『全国文学館協議会会

報 第20号』(2002年)所収の「文学館の総務に関する共同討議(第2回)」でもこの問題が取り上げられている。

<sup>30</sup> 例えば三浦綾子記念文学館館報「みほんりん」には、毎号様々な関係者から寄贈された図書、雑誌記事、新聞記事の一覧が示されている。文学館ができる以前であれば、図書館などに分散されて保存されていた資料が、文学館ができたことによって、文学館がその資料の収集・保存に務めることができるようになり、研究者にその資料の存在を館報上で示すことができるようになったということである。

<sup>31</sup> 文京区立森鷗外記念本郷図書館編．森鷗外資料目録．平成13年(2001年)版．東京，文京区立森鷗外記念本郷図書館，2001，312p.

<sup>32</sup> 同書の凡例には、「この目録は当館が鷗外記念資料として所蔵している森鷗外関係資料(2000年7月末現在)の目録です。」との記述があるように、館に「所蔵」がなされていることを明確にしている。

<sup>33</sup> だが例えば、松本清張記念館が研究誌「松本清張研究」を出しているように、そういった研究機関としての性格を持つ文学館も既に多く見受けられる。